

[ブックレビュー]

『葡萄の涙 *pleurs de la Vigne* ブルゴーニュ・ワイン修業記 還暦の挑戦』
榎本登貴男 (著) を読んで

鈴木 友佳里

山梨大学ワイン科学研究センター

老後は何をしたいかと聞かれたら、私はのんびり過ごしたいと答える。23歳の思う老後とは、代わり映えない平和な日常である。私の周りの人も同じように答えるので、大抵の人はそう思っているのではないかと思う。そのため、この本を手にとったとき、私は驚いた。「ブルゴーニュ・ワイン修業記、『還暦』の挑戦」。退職後59歳にしてワイン醸造を学ぶために渡仏し、資格取得のための試験続きの日々と肉体労働の厳しい実習に追われる過酷な道を進む著者は何者なのだろうか。

榎本登貴男氏は、文系出身でワイン醸造には全く関連のない道を歩んできた。知識ゼロ、経験ゼロの状態からのスタートであったが、彼はフランスでBPA（ブドウ栽培とワイン醸造の職業教育修了資格）、BTS VO（ブドウ栽培とワイン醸造の技能労働者と農業技師の中間的資格）を取得した。更に、62歳でDNO（醸造士国家資格）を取得するためにモンペリエの大学へ入学し、化学や生物学を若者と共に学んでいるのである。驚くべき人物だ。

『葡萄の涙～ブルゴーニュ・ワイン修業記 還暦の挑戦～』は、榎本氏が友人に向けてFacebookで近況報告してきた内容を本にまとめたエッセイである。フランスでの生活で見たこと、感じたことをありのままに綴っている。資格取得のための授業や実習の様子だけでなく、アパートを借りるのに苦労した話や彼が見た夢の話など、内容は多岐に渡る。読んでみると、こんなにもつらく大変なのになぜ頑張れるのだろうと不思議に思う。剪定の試験で氷点下10°Cの畑に3時間もいたり、フランスの役所に申請した書類が放置されていて理不尽な目にあったりと、数々の困難に遭遇する。

収穫・仕込みの肉体労働の間も試験勉強をしようとげんがりしてしまう。しかもすべてフランス語である。私だったらあつという間に音を上げてしまうだろう。彼はすべてに全力で挑み、困難にぶつかっても不屈の精神で立ち向かっていく。立ち止まらず、常に前に進み続けているのである。年齢をものともせず、目標に向かって全力で挑戦する彼の勇姿に、発破をかけられた気分だ。やることが多くて手が回りきらないと妥協してしまう自分が情けなく感じる。

私も自分の意志でワイン科学の分野へと進んだ。大学でワイン科学を学び始めてから5年が過ぎ、まもなく修士論文という形で研究の結びを迎える。大学に入学した頃の頃は、ワイン用のブドウと生食用のブドウが違うことさえも知らなかった。ワイン科学を学んでいくにつれて、ワインの奥深さに驚き、未だ謎の多いワインについて研究することの面白さを知った。研究は上手くいくことばかりではなく、むしろ困難続きだが、榎本氏に負けてはいられない。私が選んだ道だ。修士論文提出まで残された時間に限りはあるが、自分が納得できる結果が得られるまで、全力で研究に励みたいと思う。

(幻冬舎 1,300円 ISBN 978-4-344-91018-8)

<著者紹介>榎本 登貴男

1953年 埼玉県出身 上智大学卒業後、ソニー株式会社入社
2012年（当時59歳）に渡仏